

大学の図書館

No. 464 第31巻7号

2012・7

2012年7月25日（毎月1回25日発行）7月号

☆ 目次 ☆

少しずつ、上向きに。	野村 健	127
特集：大図研の今後を探るつどい		
つどい@大阪 参加報告	坂本 拓	128
東京会場からの報告	野村 健	130
ブレイン・ストーミング記録：大阪1	金森 悠一	131
ブレイン・ストーミング記録：大阪2	渡邊 さよ	132
ブレイン・ストーミング記録：大阪3	長坂 和茂	134
ブレイン・ストーミング記録：東京1	大田原章雄	135
ブレイン・ストーミング記録：東京2	加藤 晃一	136
会員数の変化について		138
大図研の今後の活動に関する調査結果		139
組織通信		142

少しずつ、上向きに。

野村 健

私が大学時代にオーケストラのサークルでお世話になった指揮者のK先生が、ある市民オケのプログラムでこのように語っておられるのを目にしたことがある。「若い時に経済学者から聞いた〈経済原理〉では企業が繁栄するには周期があって、ピークが来るのは10年とか50年とか色々あるという話だった。がんばればずっと上昇が続くと思っていたので、ショックを受けた。と同時に、自分やオーケストラも同じだと気づいた。僕は下向きにはなりたくないから、今までのものにプラス a を入れたり、少し方向転換したりしていつも上に向かうようにしている。それはオーケストラも同じでは。」

この「今までのものにプラス a 」「少し方向転換」ということは、実はとても重要なことではないかと思う。ずっと頑張り続けるだけ

だと、途中で疲労してしまったり、いつの間にか頑張ること自体が目的化して本来の目標を見失ってしまったりというようなことも起こり得るだろう。かといって、やたらに新しいものを採り入れたり急な方向転換を行ったりすると、成功は収めても、結局何年か先にはまた停滞・衰退の時期が来てしまうのではないだろうか。

スピード重視で行わないと変革はできない、という向きもあるかもしれない。が、今まで蓄積した中で本当に意味のあるもの、価値のあるものを見失ってしまう危険性も無いとは言えない。その前に、普段から少しずつのプラス a 、方向転換を心がけて上に向かうようにした方が、失うものも、落ち込んだときのショックも少ないのではないだろうか。

大図研が上に向かうように、少しずつ変えていく、変わっていく。今回の「つどい」がそのきっかけの一つになればと思う。

(のむら・けん/東京支部)

第一部：

午前はず、常任委員から、会員数の推移や財政状況などを、データを示していただきながら概観しました。会員数が2006年を境に急落していますが、これは団塊の世代の退職によるもので、そもそも大学図書館職員の数自体が減少しているの、致し方無いところでしょう。しかし『大学の図書館』2012年2月号に寄せられた会員の皆様からの声では、低額な会費設定で学生会員を取り込んだり、委託・派遣等の非正規職員の方々を巻き込む等、会員の在り方に多様性を持たせる必要性を指摘する声もあり、これは今後検討すべき重要な点である、という認識が示されました。

他の会員の皆様から寄せていただいた声では、他の図書館団体の運営も見習うべきだ、といったものもあり、他団体と大図研を比較した資料も、常任委員の方で準備いただきました。それを参照すると、大図研は全国大会の分科会で扱うテーマも、その時勢に合致したものを柔軟に取り入れ、オープンカレッジなども開催し、決して他の図書館団体にも劣ることはない活動を展開している、という認識が示されました。

第二部：

午後からは3つのグループに分かれて、大図研の今後についてブレインストーミングを行い、どのグループも大変活発な議論が交わされていました。私のグループでは、大きく「1.新規会員を増やすにはどうすれば良いか」と「2.現在の会員のより積極的な参加を促すにはどうすれば良いか」の2点を議論しました。

1については、有料のセミナーや全国大会の際に、その場で入会するとディスカウントがある、等の特典を設けることで来場した非会員の獲得ができないか検討しました。

2については、午前の資料でも示されまし

たが、大図研の運営に尽力されているのが特定の会員に集中しており、会員の中で、積極的な会員と受動的な会員の2極化が進行していることが、大きな問題の一つとして取り上げられました。多くの会員の方にとって大図研とは、何らかのサービスを提供してくれるプロバイダーでしかなく、そこで自分が遂行したい何かを実現する場だ、という認識が低いようです。より多くの方に大図研はサービスプロバイダーではなくコミュニティである、という認識を持ってもらう糸口として、レクリエーションの場（鉄道好きサークル、音楽サークルetc）など会員間の交流が図れる場を設けることなどが話し合われました。他の2グループの発表でも、やはり若手の大学図書館員の獲得をどうするか、や会員であることのインセンティブとして発表の場があることをどう理解してもらうか、など私たちのグループと共通した議題を扱われていた半面、財政面での強化のために寄付を募る案や、会員の研究支援のために Special interest group を設け予算援助をする案、などユニークなものもありました。

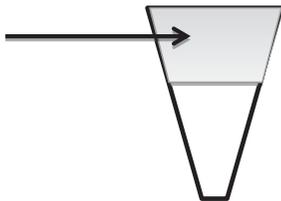
最後に：

今回の「つどい」に参加して、多くの人と意見交換をしたり自分の中で再考することで、個人的には改めて大図研が好きになりました。管理職もヒラも国立も私立も公立もあまり関係が無く、障壁が低い中で、自由に且つ真面目にいろいろなことに取り組めて議論ができる組織、というのは唯一無二だと思います。その魅力を、より多くの方に分かっていたらいいよう、私もできる限り頑張りたいと思います。

(さかもと・たく／京都大学附属図書館)

いが決め手？（子育て、異動等）

- 組合のような印象がネック？
 - 外から見ての印象
 - 中に入ると変わるのだが…
- 全国大会の分科会等
 - 業者、異業種者の参加が減
 - 魅力減のためか？
- 活動参加が活発な職場
 - 身近な会員からの誘い きっかけ作り
- 若手の頃の「わからない部分を知る場」としての大図研
- 年齢層の横と縦
 - 縦横両方ある大図研の良さ
 - 若手の会→横だけ？
 - 若手の会→自己完結？
 - 若手の会として始まった大図研→構成年齢がこのあたり



- 全体としても、逆ピラミッド
- 出入りがあって活気がある支部
 - 神奈川、京都、福岡（神奈川は1トップに引き上げられている？）
 - シカケ、イベントによって、人の動き、流れができる（ただし内容によっては、反応に差がある）
 - ex. 京都ワンデーセミナー
会員外からの協力（企画・運営、当日スタッフ）

声掛けで募集

- 大図研の活動に興味がある層
 - 会員じゃなくても、一緒にやる仲間として…
 - 参加するきっかけはいろいろ（合同例会等）
 - 広がりがあれば
- 支部制度について
 - 規定にある「都道府県別」→単位としては実情に合わない
 - 会費の納入（督促）等
 - 日図研システムはどうか
 - 支部とは何か
 - 点在の扱い
 - 新しい支部の立ち上げ
 - 支部の広域化

- 執行部→統括、全体の運営 にシフト
- 活動の場は支部中心に

……以下まとめタイムにて

………
会員、非会員のすそ野を広げる

- 支部単位について 検討する価値
 - 点在会員の不公平感
 - 会則の見直し？
 - 広域化（目の届く範囲、日帰り圏？）
 - 空白地帯の再ブロック化
 - 支部内の役員、人のローテーション
 - 幽霊会員の取り込み
 - 支部って何？？
- 研究グループ、SIG 地域（支部）
 - 個人、グループへの研究助成
 - 競争的研究費化（若手をコアに）
 - ↓
 - 全国大会等での発表（義務化）
 - 費用捻出案
 - 支部還元金を助成金に

- 編集担当はアンテナをはっている必要がある
るので、鍛えられている

- 大図研らしさとは
- 会の特徴は、年齢層が広いこと、大学図書館関係の全国組織であること、個人で入れる、ボランタリー、ゆるやかで自由、専任職員から派遣職員まで多様、国公私の枠を超えていること、実践が基盤であること、メンターとメンティがいること、専門職のコミュニティが形成されていること、
- 支部活動に大きな軸足がおかれている。どのような活動が考えられるか。
- 図書館の見学会。見学会の後、話し合いの場をもつ
- 日図研のようなテーマ別の例会
- 当日入会すれば例会参加費を無料にする
- 本の著者を呼ぶ
- 全国大会の報告をする
- 課題の共有
- 文部科学省の答申や独りでは読めないような資料を皆で読む
- 事例報告
- 選書、ガイダンス、利用案内、ビブリオバトル
- 支部のない地域の会員に対してどのようなサポートができるか
- 他支部の活動も参考になる
- 神奈川支部の秘訣は、ミーティングポイントとして例会をおこなっていること。自分がやりたいことを続けている。人が集まれば会員になる人もでてくる。
- D-hyogo の活動
- 福岡支部は、広域ゆえに活動に工夫がある。各ポイントにコアになる人がいて、ネットワークでつながっている。
- 地域でどうつながるか
- 大図研の元々の活動のサイクルは、支部活

動からはじまり、会報や全国大会を通じて全国の動きにつなげていくことであった。

- オープンとクローズ
- 大図研の実際の垣根は低い、外からはそうは見えていない。
- 連絡先がわかりにくい
- オープンな組織
- オープンなコミュニティは既に数多く存在する。それでニーズが満たされている人も多い。
- 情報収集はできるが、断片的。トレンドの話題に偏り勝ち。記録として残すことが難しい。
- 同世代中心になりがち。
- とりあえず人とつながることで満足している？
- オープンカレッジ、メーリングリスト、SNS を効果的に運用し、大図研の showcase として活用できないか。
- オープンな組織で欲求を満たすことができるのであれば、会員になる必要はない。
- クローズド
- インフォーマルな情報や体系的な情報が得られる
- 会員組織が「閉鎖的」と考えられているのかもしれない。
- しかし、会員が供出する会費（財政基盤）があるからこそ、様々な企画を実現することができる。
- 今後の戦略
- オープンとクローズドの仲介
- メーリングリスト、SNS を大図研への入口にできないか。
- 大図研の人が他のメーリングリストや他館種の活動に参加してみる
- 大図研は、研究レベルの活動をおこない成

果物をだしている。体系的な情報収集ができる。お手本にしたい先輩がいる。

- 他団体との棲み分けを考えていけばいいのではないか
 - 休日をつぶしてまで活動に参加する魅力とは何か
 - 活動する余裕がない。原因は労働環境の変化?
- 活動の可視化
 - 常任委員、全国委員の仕事をしてできるだけ見えるようにしていくには、どうしたらよいか。
 - 常任委員、全国委員、委員長にはどうやったらなれるのか
 - 各種委員、委員長の役割の明確化と公募
 - 会則の改定
 - 活動に関わってもらう、全国大会を少しだけでも手伝ってもらう
 - 活動への参加は、自己実現につながる。
 - 他団体との違いは何か
 - やったら楽しいを前面に!

(かとう・こういち/京都大学附属図書館)

参考資料

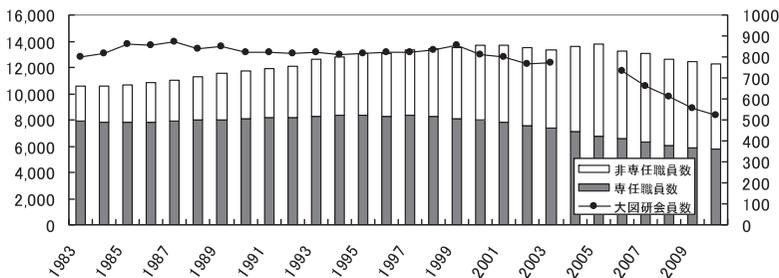
会員数の変化について

大学図書館問題研究会（以下、大図研）の会員数は減少の一途をたどっており、2012年6月現在、500名を割り込んでいる。大図研の今後を考えるうえでの基礎資料として、会員数の変化についてまとめる。

下記の図は、1983年以降の大図研の会員数及び大学図書館の職員数の変化を表したグラフ（図表1）である。大図研の会員数は、『大学の図書館』各年の議案書号に基づく数値であるが、2004年度および2005年度については会員数の記載がなかった。大学図書館員数については『学術情報基盤実態調査（旧大学図書館実態調査）』による。このグラフから、下記をよみとることができる。

- (1) 1983年以降、会員数が最も多かったのは1987年であり、873名であった。
- (2) 現在、最も多かった年に比べて会員数が約半数になりつつある。
- (3) 2000年以降、会員数は減少の一途をたどっており、減少し始めてから10年以上が経過している。
- (4) 大学図書館職員については、2004年までは専任職員数が非専任職員数を上回っていたが、2005年より逆転している。
- (5) 会員数は、割合として大学図書館の専任

(図表1) 大図研会員数と大学図書館職員数の変化



員などを設けるのは良いのではないか。

- 会員の年齢構成等の調査を行うとともに若手会員が増えない問題点などを分析することで、現状の問題点が見えるような気がします。この会の他に近年様々が発足して会員数を増やしている現状と相反しているため。
- 会報を電子ジャーナルにするなどして、会費を安くできないでしょうか。非常勤職員や派遣社員の人も入りやすくなると良いと思います。

■全国大会

- 全国大会の分科会は、これ以上増やすと大会の運営が難しくなるので、数を増やすよりこれまでの分科会を見直して内容を変えるべき。
- 全国大会について、現状でも充分盛りだくさんだと感じる。分科会などを増やしても、興味のあるものの時間が重なって一つしか行けない、という事が増えるのではないか。

■例会

- あまり考えて来なかったが、気軽に勉強できる顔を会わせての研究会をもっと企画しても良かったのではなかったかと最近では考えている。
- 入会して何回か例会に参加させていただいたのですが、どうも入りにくい雰囲気ありますね。何がどうという訳ではありませんが……でも 1 回だけ参加させていただいた兵庫支部の活動は他の方との交流もできてとても楽しかったです。ああいったアクティブな企画がたくさんあれば、新会員への働きかけとしても有効ではないかなと思います。

■会のイメージ

- 大学図書館問題研究会という名前が、いかにも堅い。最近のいろいろな自主勉強会のような、気軽に参加できる雰囲気欠ける。

- 堅苦しい、敷居の高いイメージがある。ゆるい部分も見せる必要があるのではないか。
- 「運動団体」というイメージが少なからずある。何か参加するといういろいろさせられたりと、ネガティブなイメージがある。絶対に払拭すべき。前向きに「なりたい大学図書館(員)」のイメージを打ち出すべきと思うが、「つどい」の場での議論が必要。
- 大図研に参加することが有用である、というイメージがありません。これを払拭するには、大学図書館に関する新しい情報や動向、事例等が集積されているとか参加することで、自身の研鑽につながるということが感じられる必要があるかと思います。その点で私は、研究発表や動向レビュー、事例報告等を強化する必要があり、そのための発表の場を提供するという機能が重要なのではないかと考えます。その集大成が全国大会。日常の運用はコストを考えれば紙ではなく Web ベースで行う必要があるでしょう。

■その他

- 地道に継続していくことが必要と思います。
- 政治的な発言や活動(日図協の役員への投票依頼とか)はやめた方がよいと思います。
- 知り合い同士の内輪のやり取りに終わらないようにすることも、新規の参加者を迎える上では必要かと思います。
- まだ大図研会員になりたてなので、内実が良く把握できていない状態です。今の段階で言えるのは、ウェブサイトはもう少し洗練されたデザインにした方が良いでしょう。過去に一度だけ全国大会に参加したことがあります。大学図書館というネットワークをもし視覚化したとしたなら、まさしくここにあるのではないか、という気がしました。大図研はそもそも現場の労働問題や図書館の問題を共有し、解決を模索するために発足した団体だったと理解しています。

その意味では、もっと現場を取り巻く諸問題に焦点を当てた企画があっても良いと考えます。

- 運営に関わっている会員以外は常任委員の負担も研究会全体の活動もよく分からないのではないのでしょうか。もう少し運営の動きが一般会員にも伝わると良いと思います。また、自分が入会したころを思い出すと、研究会への参加を誘われたとき活動実態が不透明なため入会に二の足を踏みました。仲良しサークルなのか、もう少しアカデミックな会なのか、実態の分からない会へ個人情報を提供することと5000円の会費+支部会費を支払うことについても躊躇したことを覚えています。私は研究会を通して全国的に繋がりを作ることができましたし、沢山勉強させてもらっていますので、結果的に入会して良かったと思っていますが、外部からは研究会の活動実態も入会のメリットもよく分からないことは新規会員獲得へのデメリットとなっているのではないのでしょうか。
- 大図研の活動について、全国大会に参加した人は理解できていると思いますが、参加してない人も多いため、紙媒体やWeb、SNSなど色々な手段で情報提供をすることによって活動を広報することが必要と思います。大図研は小規模大学が図書館の動向を知るうえには非常に良い研究会と思っています。レベルが高いという人もいますが、全国大会は少しレベルが高い方が図書館の向上には良いと思います。ただ、各支部の例会はレベルの低い例会から高度なレベルまで幅広い例会の方が、多くの図書館の人が参加しやすいと思います。自分の興味あるテーマの時に参加できる選べる例会にしたいと思っています。全国大会の分科会の数は今まででの数で良いと思います。数ばかり多くても一人で参加するには限りがあります（種類、内容については時代に

より検討する必要があると思います）ので、今までの数で良いと思います。

- 最近、大図研の活動に参加できていないので、動きがよくわからない。大図研の活動はメーリングリストと会報のみで得ている状況。図書館界全体がそうだが、子育て世代に優しくないと思う。全国大会、研究会などに参加しなくても、もっと全体の活動がわかるような情報発信が必要かなと思う。そういう意味でも、今のところ、MLがもっとも有益な情報になっている（自分の時間がなかなかとれず、自分から情報を入手していく時間がないので、MLのような受動的なツールが今の自分にはありがたい）
- 大図研は、大学図書館員の全国規模の職業団体としてはほぼ唯一。大学図書館のトレンドを追って情報収集と発信するよりも、CAに紹介されるようなトレンドをつくりだすくらいの勢いで、業界を引っ張るような存在になるべき。
- 紙よりもウェブ、イベントは全部Ustreamで中継して、透明に。研修もウェブ参加できるとよい。「問題」の「研究」より「解決」を。生涯会員、新規加入は1年間会費無料、などで会費システムは柔軟に。
- 4. 5. 6. について、印刷媒体を充実させてもメリットは少ないと思う。従来の団体に加えて様々なコミュニティが増えているし、活動は量より質を重視するべきではないか。
- 「大学図書館所蔵情報の文化財としての継承」を研究テーマとして扱うようにしていただきたい。
- 会報や事務的なルーティン作業は、委員の方々の負担を減らすためにもできるだけスリムにした方が良いと思う。事務作業でも研究会・例会などでもルーティン化してしまうと「続けること」が目的になってしまい、作業量やテーマ探しなどが負担になるのではないかと感じている。抽象的だけれども、「やりたい人がやりたい時にやりたい事がや

大学の図書館 第 31 巻 7 号 (通巻 464 号) 2012 年 7 月 25 日 (毎月 25 日発行) ISSN 0286-6854

編集:『大学の図書館』編集委員会 発行所:大学図書館問題研究会

定価:送料共 500 円<年間予約購読料 送料共 5,000 円 *購読申込先:別記の出版部>

出版物の購入、問い合わせ等の連絡窓口 金田千津子 (出版部) 文教大学越谷図書館 Fax: 048-974-8040

e-mail: kaneda@lib.bunkyo.ac.jp 〒 343-8511 埼玉県越谷市南荻島 3337

<出版物購入代金等の振込先>郵便振替:00140-6-482205 大学図書館問題研究会出版部

銀行口座:三菱東京 UFJ 銀行 越谷駅前支店(普) 1403054 大学図書館問題研究会出版部

研究会事務局 高井 力 (事務局) 〒 131-0032 東京都墨田区東向島 1-14-2

Tel&Fax: 03-3619-4565 e-mail: jimu@daitoken.com

<会費納入先> 郵便振替 00190-2-79769 大学図書館問題研究会(支部所属の方は、各支部に納入してください)

れる」組織なら所属していて楽しいと思う。

- 基本的に言い尽くされ感も感じますが、その後の実行が肝要かと思えます。運営サイドの皆さんに期待もしますが、若手を絡ませるための抜本的な変化も肝要でしょう。ご協力はさせていただきたいと思っています。また、繰り返しになりますが、「大会会計の公開」「大会の構成の変化(今回はいろいろ検討されたことと思えますが)」は重要だと感じます。問題点を明確化して、具体的な改善策が取れるよう進めていただきたいところです。
- リーフレットは他の研究会でも置いていても、あまり持って行ってくれません。「できれば関わりたくない」という感じでしょうか。SNSなどで情報を共有する人が多い中、お金を払ってまで何処かに所属しないと得られない情報や「何か」があるという意識は稀薄になっているのかもしれませんが。人とのつながりは大きな資産ですが、リアルに接することとネットで「知っている人」との違いはあまり意識されなくなっているのかなとも思います。でも明らかに違う「何か」があるはず。こんなことをいうこと自体古い考えと言われるかもしれませんが。

組織通信